## 火山の霊気が漂う神秘の半島

旅のはじまりは、九州大分県の国東半島に決めました。

国東半島は一つの巨大な火山「両子山」から形成された半島です。航空写真で見ると、山の形はほぼ円形になっていて、中央の山頂部から半島の外縁部にかけて、谷間を表す線が放射状に延びています。

国東半島に伝わる話として、七一八年に両子山西側の麓にある宇佐神宮の祭神、宇佐八幡神の化身である仁聞菩薩が半島全体に二十八の寺を開基したことから、半島独自の「六郷満山」文化が発展していったといわれています。六郷満山の「六郷」とは両子山の谷筋に沿って開けた「田染」をはじめとする六つの郷を指します。これらのほとんどは、宇佐神宮の荘園でした。

起源は神話時代であり、仁聞菩薩が実在していたかも定かではありませんが、宇佐神宮から始まった神仏習合の信仰は半島全体に伝わり、後に修験道の場としても流行ることになりました。

両子山はおよそ百万年前に活動を止めた火山ですが、国東半島が位置する大分県には「地獄めぐり」で有名な別府温泉、隣接する熊本県には活火山の阿蘇山があります。

新宗教などを研究している知人の神秘学者から、ある時、このようなことを私は聞きました。

「日本の国土は不安定です。地震は日常的に起こるし、火山は噴火するし、温泉地では地下から熱湯が湧き上がってくる。絶えず大地の深層から伝わってくる震動は『霊気（スピリット）』と言い換えることができる。日本人は不安定な風土によってスピリットに敏感になり、その繊細な感覚が日本独自の『神』の概念につながっていったのだと思います」

四十年近く前に聞いた話ですが、それから私も自分なりに仏教と神道の探究を続け、神社仏閣を訪れる時も、ただ建造物の美しさを見るだけでなく、根底に流れる「心霊パワー」を感じ取ろうとするようになりました。神秘学者のいう「大地不安定説」から考えると、国東半島一帯には両子山の地下深くから発せられた霊気が、ずっと漂っているように思えてきます。今回はその心霊パワーを追いかける旅になることでしょう。

### 阿弥陀（あみだ）三尊のような岩の奇景

大分県道の豊後高田安岐線（ぶんごたかだあき）を桂川（かつら）沿いに車で進むと、太い列柱状のゴツゴツした岩峰が目に飛び込んできます。「三の宮の景」と名付けられたこの奇景は、両子山の火山活動によってできたものです。

三の宮の景

ここから五十キロメートルほど西に行った中津市には、ダイナミックな線形の崖の眺めから「日本の三大奇勝」に数えられる「耶馬渓（やばけい）」があります。耶馬渓という名は、江戸時代の文人、頼山陽（らいさんよう）が中国風に命名したもので、それ以降、国東で奇景をなす峰々は「○○耶馬」と呼ばれるようになりました。

六郷の一つ、田染エリアに位置するこの三の宮の景にも「田染耶馬」という別名が付いています。中津の耶馬渓は、山や川が広大で、近くに大きな道路や駐車場がありますが、三の宮の景は、場所によっては、浅瀬に敷かれている数点のブロックを踏むだけで対岸まで渡れるところがあります。山の高さも控えめで、一見彫刻のようにも見えます。三の宮の景の近くには、

有名な「鍋山磨崖仏」があります。この一帯の地質である火山砕屑岩は、磨崖仏の彫刻には最適なものなのでしょう。

実は、最初にこの眺めを見た時、私の頭は国東半島の代名詞ともいえる磨崖仏で占められていました。だからなのか、この岩を磨崖仏だとすっかり錯覚してしまいました。丸みのついたてっぺんの部分が仏像の首、緩やかに広がった裾部分は結跏趺坐の足組みに見えて、長年雨風に晒された阿弥陀三尊のようだったのです。

そもそも「三の宮」という命名が、私には仏像の様式を喚起させます。神道では高天原の神話や神社の祭壇に「三柱の神」の発想があり、仏教では「阿弥陀三尊」「釈迦三尊」など、真ん中の主尊、左右に脇侍という三尊スタイルがあります。当時は神仏習合でしたので、神道も仏教も基本的には同じような存在であり、私が勘違いしたように昔の人々にも、この山が三柱の神、もしくは三尊の仏に見えていたのかもしれません。

「天の手」によって彫られた三の宮の景の、自然による阿弥陀三尊は、私にとっては六郷満山の玄関口と思われました。三の宮の景近辺にある国東の代表的な磨崖仏である「元宮磨崖仏」「熊野磨崖仏」などを見ることが、今回の旅の大きな目的の一つですが、実は国東半島はもう一つ、偉大な歴史遺産を抱えています。私たちは磨崖仏をいったん後まわしにして、先にそち

らへ行くことにしました。

### 日本が誇るもう一つの庭園「田んぼ」

日本庭園は苔、石、松、紅葉、竹垣、池、砂、灯籠などを絶妙なバランスに配置した自然の芸術作品です。世界的に有名な香川・高松の公園から、京都の禅寺の枯山水まで、日本の庭はいまも昔も観光客を惹き付けてやみません。

さて、私は子供の時から、これらとは別の種類の日本の庭を愛していました。その庭に前述した要素は何一つ見当たりません。私の愛する庭園は「田んぼ」です。

イタリアの葡萄畑やフランスのマスタード畑のように、農業が美しい風景を作り出す例は世界中にあります。日本では稲作のほかに、瀬戸内海周辺のみかん畑や北海道美瑛町の花畑など、種類は多岐にわたります。私が五十年前に築三百年以上の古民家を購入した、徳島県祖谷の山の斜面はススキに覆われています。ススキは刈ると屋根を葺く茅になるので、私にとってススキは野生の植物ではなく、農業景観の一つです。

そのように、さまざまな田園風景がある中で、最も美しいと思うのは、やはり水田です。稲は水生植物ですので、治水管理のために水田の周りには水路とあぜ道が作られ、その効果

で田んぼは額縁に収められた絵画のようになります。

日本では田植えの時に苗を一定間隔で真っすぐに植え付けていくので、水田の中に細い幾何学的な線が現れます。春は水を張った表面が鏡のように青空と雲を映し込み、やがて繊細な稲穂が育つと、刈り込まれた芝生の庭のような眺めになります。夏に稲穂は強烈な緑へと色を濃くし、秋になるとパステルグリーンと黄色を経て、金色に変化していきます。水を張るため、傾斜地では棚田が作られ、あぜ道は等高線のような曲線を描きます。このように田んぼの「パズルピース」が組み合わさって、心に訴える「アースアート（大地の芸術）」が生まれていきます。枯山水に劣らず、手の込んだ技術と管理が必要とされる水田は、れっきとした「庭園」といえるでしょう。